

認知症と共生する社会へ向けて ⑨

昨年末に「認知症と向き合う幸齢社会実現会議」で議論された、「本人主体で認知症と共生する」「本人の尊厳を守り希望を実現する」という具体的なイメージについて、前々回から80歳代後半の一人暮らしの女性 S さんの事例をお話ししています。



ある日、S さんが毎日午前中に通いつけている、近所の喫茶店（コメダ珈琲）の店長から長女の携帯電話に電話があったことで、認知症の母に対する長女の考え方が大きく変わったそうです。

これまで長女は、「母が周囲に迷惑を掛けるのではないか」「母が危険な目に合うのではないか」という純粋な母親 S さんに対する心配とともに、「認知症の母をひとり暮らしさせていることで、冷たい娘と思われてしまうのではないか」と自分自身に向けられる周囲の目を気にしていたのだと、ハッと気づいたそうです。

S さんは確かに認知症の症状が強く表れているところがありますが、自分の意思で行動し、コメダ珈琲店でのやり取り、郵便局、コンビニ、スーパーなど、十分に地域社会と関わり合いながら、つまり「地域と共生」しながら生活していたのです。

つい先日は、見慣れない可愛らしい文字で宛先が書かれた郵便物が、長女の自宅に届きました。差出人は、やはり同じ可愛らしい文字で母親 S さんの住所と名前が書いてありました。封を開けると、母親 S さんによる乱れてところどころ間違えた文字で長女の宛先と差出人の住所氏名が掛かれた封書が入っていました。S さんが自分あてに届いた書類を長女に郵送しようとしたところ、これでは配達できないと判断した若い女性の郵便局員が、新たな封筒を用意して宛先を書いてくださったのだと容易に想像がつかしました。

こうやって、喫茶店も郵便局も、ちょっとした手助けをしてくれることで、S さんがひとり暮らしをつづけていくことを見守ってくれています。S さんが住み慣れた地域でこれまで通り生活をつづけようとする意思があるのなら、長女は、娘として転倒など多少のリスクは受け入れた上で、それを尊重してあげるべきだと腹をくくったのだそうです。

長女はその後、S さんがお世話になっている近所のコメダ珈琲や郵便局等に、S さんに内緒で挨拶に行ったそうです。改めて何かあったときの連絡先を伝えた上で、「これからも母をよろしくお願いします」と。その際「母が迷惑をお掛けして」という言葉は決して使わなかったそうです。認知症が地域にとって「迷惑」な存在になってはいけないという気持ちからでした。

母の暮らす地域の人たちが、認知症の母が地域と共生するためのちょっとした気遣いやお手伝いをしてきているなら、長女自身も自分が暮らす地域で、認知症の人が共生するちょっとした気遣いやお手伝いをしていけば良いのだと自分に言い聞かせたそうです。

認知症と共生する社会ということは、このようにそれほど難しいことではありません。認知症を特別視せず、ちょっとだけ気に掛けてあげれば良いのです。 つづく